

そのままになってしまった。

雷神様の威力か、卯之助爺様の機智か、今も雷神山は昔のまま、鎮座している。終戦前まで（昭和二十年）早魘の時、若者たちがよくお籠りしたものである。

（話者 円谷 嘉一・円谷 実）

梓 衝 神 社

《宮 本》

昔、日本武尊東征の時、柵木の八尋の梓を、亀居山頂上にある天然の立石を祭場として立て、武甕槌神を祭り、蝦夷平定の祈願をしたところから、梓衝の地名が起こつたといわれる。

この山は亀居山と呼ばれている。古代の信仰思想は、高い山、高い木、大きな岩に神が宿る所とされていたので、ここの要石に神が宿り、神居山といつて信仰されたものが、長い間に言葉が訛つて、亀居山となったものであろう。また全山亀の形に似ているので、その名があるともいわれている。

人皇五十二代嗟哦天皇、弘仁十二年卯午七月十日、弘法大師が当村に来て、亀居山の麓に一寺を起こした。

丑寅の方向に、夜な夜な怪しい光が輝き、さながら日光の如く見えた。村人は驚いて、大師にこのことを告げた。大師が近づいて見たところ、ただ塚があるだけで、別に何物も見えない。

大師は塚下で二日三晩の修念の祈祷をしたところ、不思議な怪火が止まり、勿然として御鉾が塚から出